

浅田宗伯著 橘窓書影を読む 1-021~040

基礎理論 § 現代

峯 尚志





1-021 魚鱗癬 共考

原謙甫、全身の皮膚甲錯、魚鱗癬。小腹拘急、脈数、消穀善飢、氣逆暴怒（切れやすく怒り出すと止まらない）世の医者は皆、腎虚とし、滋補の剤である八味丸などを投じ、氣逆はますますひどくなり、肌膚甲錯も悪化した。宗伯思うに、この人性急で肝の火が血を克している。そこで〇〇湯に〇〇湯を合して与え、諸症状少しずつ改善していった。

その2年後、再発し、腹満脈細数、乾血勞（顔や目が暗黒色で皮膚は乾燥してざらつき、身体は痩せ、骨蒸潮熱し、盗汗し、口乾あり頬紅く、驚きやすくめまいがして頭痛し、月経は少ないか閉経する病症）宗伯は大黃庶虫丸を出そうと思ったが、他の医者が温泉療法を勧めたので、湯治にいったところ虚脱症になり、他界した。

共に考えよう

- 八味丸で症状が悪化したのは何故か
- 八味丸で特に悪化要因となった生薬は？
- 消穀善饑から考えられる病態は？
- 干からびて甲錯した皮膚に対してどのような治療戦略が考えられるか
- 2剤を選んだということは治療戦略が2つあるということ、それに見合った処方はないか。

考察

魚鱗癬は、皮膚が乾燥して硬くなり、魚の鱗（うろこ）のように角質が厚く積み重なり、剥がれ落ちる皮膚疾患。魚鱗癬の中の尋常性魚鱗癬は、原因遺伝子であるフィラグリン遺伝子が同定され、ごく軽症の者も含めると人口中の数%に存在する。フィラグリン蛋白の発現が低下することで、皮膚の保湿能力が低下し、皮膚が乾燥する。遺伝性疾患であり、小児に多く見られるので、本例も急に発症と言うよりはもともとあった症状ではないかと思われる。

ただ、乾燥し、苔癬化した皮膚であることから、乾癬の可能性もあると思われる。

いずれにせよ、弁証としては皮膚甲錯、脈数、消穀善饑、小腹拘急、気逆暴怒から血虚、血熱、陰虚陽亢、肝陽上亢が考えられる。小腹拘急から八味丸がでたのかもしれないが、これでは熱をあおるだけなので逆効果なのは、納得である。私なら抑肝散加陳皮半夏に温清飲をあわせたような処方を考える。宗伯が処方した黄連解毒湯と四物湯をあわせて温清飲であり適正な処方であったと思う。

2年後の再発、腹満脈細数、乾血勞（顔や目が暗黒色で皮膚は乾燥してざらつき、身体は痩せ、骨蒸潮熱し、盗汗し、口乾あり頬紅く、驚きやすくめまいがして頭痛し、閉経）は陰虚陽亢で知柏地黄丸の適応か？陰虚で気が上焦しているとき、虚勞の時の温泉は体力を消耗して、発汗で更に陰液を失うので逆効果。本例では陰虚を乗り越えて脱水症となった可能性もある。あるいは、季節はわからないが、冬期の温泉であれば、急激な温度差によるヒートショックによる血圧低下や不整脈の誘発により、死に至った可能性もある。

宗伯の大黃廬虫丸は強烈な駆瘀血薬で瀉法であり、このような虚勞の病態に用いることは、躊躇されるが、瘀血の強いときは一時的にこのような強い瀉法をかけることはあり得る。そのあとに補血、補陰、清熱などの組み合わせの処方を出すというのは、考えられる。

1-022 痔疾

山本権兵衛の母。痔があって一ヶ月便秘している。肛門が火のごとく痛むと訴える。宗伯は、大承気湯に黄芩、乳香を加えて、処方。猪胆汁に酢を加えて肛門に濯ぎ、腫れているところに塗る。翌日燥屎を7, 8回下し、痔痛も改善した。

考察

以下に痔の代表処方挙げる。補血活血止血の生薬が使われている。消炎には黄芩が多用される。

槐角丸（槐花、地榆、黄芩、枳殼、当归、防风）

芎归膠艾湯（川芎、当归、地黄、芍薬、甘草、艾葉、阿膠）

桂枝茯苓丸（桂枝、芍薬、牡丹皮、桃仁、茯苓）江戸時代原南陽創方に甲字湯（桂枝茯苓丸加甘草生姜）がある。

また痔は便秘で悪化するので下剤とくに大黄を含む処方が用いられる。特に大黄は消炎、抗菌作用をもつため多用される。

乙字湯（柴胡、升麻、黄芩、甘草、大黄、当归）

麻子仁丸（麻子仁、芍薬、枳実、厚朴、大黄、杏仁）

潤腸湯（当归、地黄、麻子仁、桃仁、杏仁、枳実、黄芩、厚朴、大黄、甘草）

大黄牡丹皮湯（大黄、牡丹皮、桃仁、芒硝、冬瓜子）

潤腸湯は黄芩を含むため、一般診療で余り用いることはないが、痔の場合、消炎効果を期待して検討すべき処方である。

さて宗伯は大承気湯に乳香、黄芩を加えて処方。乳香はカンラン科植物の樹皮で、活血化瘀、理気止痛、消腫生肌で痔のうっ血をとり、止痛し、肉芽の再生を促す効果があることから、とても有用な生薬と考えられる。便秘が1ヶ月以上も続いていたので、大黄、芒硝の量は多く使い、峻下させたのだと思われる。宗伯の、時に大胆な処方の運用がうかがい知れる。

1-023 駿河屋長五郎の胃の実熱

駿河屋長五郎 胃の実熱ありて不食し、引飲、常に渴す。
医者がこれを攻めて弱って羸瘦が激しくなった。

宗伯は千金茯神湯を与えると、精気は大いに回復し、食事が
少しづつとれるようになって病は漸く癒えた。

茯神湯の構成

千金茯神湯《備急千金要方》: 茯神・茯苓・人参・菖蒲・
赤小豆

考察

口渇、胃熱、不能食の症例。医者がこれを攻めて弱り、羸瘦したとあることから、私は寒熱錯雜の半夏瀉心湯を考えた。口渇があるので、五苓散、あるいは甘草瀉心湯加減を意識して苓桂朮甘湯をあわせるかもしれない。

ところが宗伯が処方したのは千金茯神湯あった。千金茯神湯は孫思邈の備急千金要方にある処方で茯神、茯苓、人參、菖蒲、赤小豆の五味からなる。

茯神は養心安神、茯苓も安神と利水健脾、人參は大補元氣と養心安神、菖蒲は開竅寧心でぼんやりした意識を改善する作用、赤小豆は利水祛湿で血滯を治す作用があり、心経に入り、心に溜まった湿濁を取り除く。原典に「治心虚不足、恍惚妄語、悲傷不楽」とあるように心脾両虚による精神不安、動悸、不眠、健忘、意識の混迷に用いる処方となる。

服する旬日（じゅんじつ：10日間）余り、精氣大いに回復し、食少しく進み、病漸く癒ゆとあるように、胃熱はすでに去り、心身と脾胃が相当弱った状態であったと推測される。

1-024 崩漏と菱臂

症状

1

三村直治、妾、瀧。經水漏下止まず、腰下痿軟、起歩する能わず。身に寒熱なく、飲食はいつも通り、宗伯、温經湯を与えること数日にして、月経が止まって遂に菱臂して動けなくなった。

治療

2

そこで、大防風湯を与え、虎脛骨丸を兼用して3ヶ月あまり、少しづつ起きて歩けるようになって治癒した。

宗伯の考察

3

産後の菱臂で足の立たないものには、桂枝加朮附湯あるいは大黃附子湯を用い、証に随って紫円を時々用いると良い。

本治には、附子剤を用いると良い。また鶴膝風には大補湯(十全大補湯)、大防風湯の類を用いて虎脛骨、穿山甲を加えると奇効がある。特に穿山甲は有用である。

考察

経水漏下止まず、腰下痿軟、起歩する能わずとあり、腎虚による崩漏が考えられる。年齢も更年期に近いのではないだろうか。温経湯は更年期の経水不利には有効であったと思われる。

ただし、背景の腎虚は改善していないために歩けなくなった。

宗伯は気血両虚の大防風湯とともに腎虚による疼痛を治す医学心悟などを出典とする虎脛骨丸（ここうこつがん）を兼用した。虎脛骨丸は、虎骨、杜仲、牛膝、狗脊、当帰、乳香、没薬、桂枝、竜骨、茯苓などを含む処方で補腎強筋、活血化瘀により痺証を治す処方である。菱躰の原因は、脊柱管狭窄症、末梢神経障害などが考える。エキス剤なら、牛車腎気丸と大防風湯をあわせて処方するかもしれない。

参考 穿山甲

穿山甲：基原：センザンコウ科の動物（マレーセンザンコウ *Manis javanica* など）の鱗片（角質のうろこ部分）性味：鹹（しょからい）、微寒、帰経：肝・胃経、形状：硬いケラチン質の鱗を乾燥させて用いる

現在はワシントン条約で使用不可

薬能：通絡下乳、消腫排膿、活血散結、

応用：産後乳汁不足（通乳）、乳腺炎、乳房硬結、癰腫・瘰癧（頸部リンパ節炎など）、外傷腫脹、打撲傷、癥瘕積聚

穿山甲の代替生薬

通乳目的 → 王不留行が穿山甲の第一代替候補

消腫・排膿・硬結改善 → 皂角刺が穿山甲の代替候補

・実際の臨床では、目的によって王不留行＋皂角刺を併用して穿山甲の幅広い効能を補うことがある。

【乳汁分泌促進（通乳）】 王不留行＋通草（または木通）＋当帰 → 王不留行が通乳作用を担い、通草・木通が乳管通利、当帰が血を補って分泌を助ける。

【乳腺炎・乳房硬結の消腫排膿】 皂角刺＋蒲公英＋金銀花 → 皂角刺で活血・消腫、蒲公英・金銀花で清熱解毒と抗菌作用。

【瘰癧（頸部リンパ節炎）・硬結】 皂角刺＋夏枯草＋玄参 → 皂角刺で血行改善・硬結軟化、夏枯草・玄参で清熱軟堅。

【外傷腫脹・打撲】 皂角刺＋乳香＋没薬 → 活血・消腫・鎮痛作用を相乗的に高める。

【癥瘕積聚（子宮筋腫・卵巣嚢腫などの瘀血性腫塊）】 王不留行＋桃仁＋赤芍 → 活血化瘀と通絡作用を強化し、瘀血性腫瘤の縮小を目指す。

・

1-025 陰囊の腫れ物

大倉屋林兵衛。奇病。陰囊偏大、堅硬、痛み甚だし。

衆医、疝の病として治すが効果なし。赤い腫れは次第に紫黒に变じ、漸く腐敗し膿なく陰囊の皮が脱落して睾丸突出、日夜痛みに耐えられない。日夜痛み耐えがたく、便秘して渋り、心煩して発熱し、舌は乾燥して口渴し、穏やかに眠ることもできない。膿が出た後、腹皮は赤く腫れ、5, 6日後、下腹に水疱ができて、穿刺すると穴ができて、そこから汚水が一升あまり、等出する。脈無力、汗出で、四肢厥冷、精神恍惚、極虚の状態となる。



考察

陰囊の腫れは感染を伴い、睾丸が露出する状態まで悪化し、感染は腹腔内までひろがり、腹膜炎、敗血症に至り他界した症例と考えられる。宗伯は未だその治法を発明せずと記載している。おそらく宗伯が診察したときにはまったくなすべがなかったのだろう。また同様の救命できなかった症例についても記載し、時代をへてこの病症の治療に役立つように、臨床報告を記録したものと考えられる。

労疝、東医宝鑑にある腎臓風、

淋毒より脱疽に変わる『切要方義』の五香連翹湯（大黄10;連翹・射干・独活・升麻・桑寄生・沈香・藿香・木香・丁香・甘草各7;麝香3）を紹介。

1-026 長年の消耗性疾患 共考

久保村の村長、岩瀬五良左衛門。数年来の癰毒を患い、骨髓に内攻して節々が痛み、筋肉は枯れて痩せ、悪寒や熱感があり、飲食進まず、年齢が30代にもかかわらず、70か80代の老人のようである。衆医の治療も効を奏しない。

宗伯、〇〇を与え、〇〇を併用する。秋に至りて病状が大いに改善し、冬に親戚一同から蘇生のお礼を言われた。

共に考えよう

- 癰毒とはどんな状態か
- 骨髓に内攻して節々が痛み、筋肉は枯れて痩せ、悪寒や熱感があり、飲食進まずの病態をおこす病名は？
- この状態に適応する処方は何か

考察 ○○は大百中飲と虎脛骨丸

癥毒とは、慢性の炎症性の腫瘤、或いは悪性腫瘤を指す。毒は、慢性の炎症や、悪性の腫瘤により、長期にわたり、身体をむしばむ状態を意味する。

本例においては骨髓に内攻するとあるから、悪性腫瘍の骨転移、進行性の結核や、慢性骨髓炎などの疾患が考えられる。飲食進まず、痩せ衰えて30代なのに70代に見えるというのは、悪液質による羸瘦を思わせる。あるいは、関節の腫脹変形を癥毒と解釈できれば進行した関節リウマチも考えられる。あるいは、腹にある塊として寄生虫症も考えられる。

現代なら、抗がん剤、分子標的治療薬、免疫療法、抗生剤、抗結核薬、抗リウマチ薬、虫下しなどに加えて十全大補湯などの補剤を補助療法とするなどが考えられる。痛みがあれば大防風湯も選択肢。

従って治療においては正気の扶正と、病毒の祛邪の補瀉兼治の治療が考えられる。祛邪には、清熱解毒、活血化瘀、扶正には補気養血、排膿に関しては托裏消毒などの補瀉兼治の方剤を用いる。

大百虫丸飲は三黄瀉心湯加山帰来に桂枝甘草、牛膝、楨榔子、人參、杜仲、沈香を加えたもので、三黄瀉心湯、山帰来で清熱解毒、桂枝で温陽鎮痛、人參で補気補脾、牛膝、杜仲で補腎、沈香で行気止痛、楨榔子の行気駆虫の処方。虎脛骨丸は、虎骨、杜仲、牛膝、狗脊、当帰、乳香、没薬、桂枝、竜骨、茯苓などを含む処方で補腎強筋、活血化瘀により痺証を治す処方である。

さてこれらの処方で時間をかけながらも、病状が快復したということは、寄生虫症に関節リウマチのなどの消耗性疾患を併発した病態ではなかろうか。寄生虫による癥瘕とリウマチによる骨節痛があり、これらの処方で徐々に病状が改善したのではないだろうか。虎脛骨丸のかわりに大防風湯などの処方もある。

処方内容

大百中飲:山帰来・牛膝・檳榔子・桂枝・黄芩・川芎各3;人參・杜仲各2;甘草・黄連各1.5;大黄・沈香各1
『外科正宗』（薛己）

大百中（虫）飲は三黄瀉心湯加山帰来に桂枝甘草、牛膝、檳榔子、人參、杜仲、沈香を加えた処方。寄生虫（回虫など）や腸内の異常滞留物を駆除し、脾胃を健やかにする

虎脛骨丸は、虎骨、杜仲、牛膝、狗脊、当帰、乳香、沒薬、桂枝、竜骨、茯苓などを含む処方で補腎強筋、活血化瘀により痺証を治す処方。

1-027 神仙勞（拒食症？）



症状

市川八郎右衛門、妹、芝鶴。奇疾あり。事のはじめは、元気ややる気が出ず、食欲も日に日に減じ、特に穀物を受け付けることができない。ただ、紫海苔を食べている。日に一両枚、他苦しむところなし、医は神仙勞（神経性食思不振症）としている。いろいろな薬方を試すが効果なし。



診断

宗伯、腹診するに左脇下に僻塊（胃癌）あり、これを触ると肩背に放散して痛む。大便一日一回少量、小便も一日一回、宗伯、これは腫れ物のせいだとして、延年半夏湯をを与えた。



治療

この処方を一ヶ月服用すると、塊は縮小して少しだけそば粉を練った麺を食べることができた。治療すること半年、飲食が日常に戻り、全快した。

癖積

- 「癖」は、主に左の肋骨下（左季肋部）に現れる硬い腫塊。左脇腹に固くて動かないしこりがあり、押すと痛みがあり、慢性的に持続。胃・脾など消化器系の不調や、慢性的な気滞、血瘀（血流停滞）によって形成される。
- 「積」は、腹部の中央（心窩部・臍周囲）に存在する硬い腫瘤であり、比較的大きく、動かすと動揺感がある場合もある。慢性的な消化不良、食欲低下、栄養不足に伴って形成されることが多く、慢性的に消耗する疾患（消耗性疾患）の場合に現れやすい。主に脾胃の虚弱、痰湿の停滞、慢性の消化機能不全が原因とされる。
- 現代医学的には、慢性胃炎、慢性肝炎・膵炎・鼓腸、がんなど腹部腫瘤を伴う疾患などが考えられる。
- 痙癖の痙とは胸脇部（特に左右の季肋部）に発生する硬い腫瘤を指し、肝気鬱結、気滞血瘀、脾胃虚弱、痰湿内停に起因するとされる。押しても動かず、持続的で慢性的な特徴を持つ。

神経性食思不振症の予後（経過と転帰）

- 治療介入が早いほど予後は良好。約50%は寛解するが、再発率も高い（約30%～50%）。長期的に慢性化すると、死亡率も増加（約5～10%）早期発見と継続的治療が非常に重要

その他の神仙病の治験

1

婦人の症例

1婦人、指迷七気湯:三稜・莪朮・
青皮・陳皮・藿香・桔梗・桂枝・
益智仁・香附子・甘草各3;生姜6

2

呉服屋の女性

呉服屋の女、大七気湯を与え、三
因神授丸を兼用、1年で治った。

3

悪血による症例

悪血によるもの、大黄庶虫丸

神経性食思不振症

いわゆる『拒食症』と呼ばれる摂食障害の一種で、正式には『神経性やせ症（Anorexia Nervosa：アノレキシア・ネルボーズ）』と呼ばれる。心理的要因により極端な体重減少や栄養障害を引き起こす病態。

体重増加に対する過度の恐怖心や、体型・体重への強迫的なこだわりから生じる摂食障害。

・主に若い女性に多く発症（90%以上が女性）。思春期・青年期に発症が多い（12～25歳が中心）。日本での生涯有病率：約0.5～1.0%程度。

【身体症状】

・著しい体重減少（BMI < 17.5kg/m²）無月経（月経停止）貧血、低血圧、低体温、徐脈。皮膚乾燥、脱毛、爪のもろさ、うぶ毛の増加。電解質異常（低カリウム血症など）。骨粗鬆症（低エストロゲンによる）

【精神症状】

・強迫的な体重減少へのこだわり自己イメージの歪み（痩せているのに太っていると感じる）極端な食物制限（摂取制限、断食、カロリー計算へのこだわり）過度な運動、下剤乱用、嘔吐誘発など異常行動

治療

チーム医療（内科医、精神科医、栄養士、臨床心理士）が基本。

1. 栄養療法（身体管理）・体重回復を目的に適切な栄養を提供（経口摂取困難時は点滴や経腸栄養法）・電解質・水分管理（特に低カリウム血症）
2. 精神療法（心理療法）・認知行動療法（CBT）：歪んだ認知や行動の修正・家族療法：若年患者に有効・精神力動療法（心理的な背景を深く理解し治療）
3. 薬物療法・抗うつ薬（SSRIなど）：不安・抑うつ症状に対して・抗精神病薬（オランザピンなど）：強迫症状・体重増加促進・補助的治療として行われることが多い（単独での治療効果は限定的）

4. 漢方治療

肝鬱脾虚型 逍遙散・柴胡疏肝湯・半夏厚朴湯

脾胃虚弱型 主な症状：六君子湯・香砂六君子湯・人參養栄湯

痰湿阻滯型・二陳湯・半夏白朮天麻湯

心脾両虚型：帰脾湯・加味帰脾湯

陰虚火旺型 麦門冬湯・知柏地黄丸などが用いられるが漢方の効果は限定的である

中医理論では「脾虚・肝鬱・胃熱・痰瘀」など複合病理に対するアプローチ。

個人的には脾虚の方剤だけでなく、脳の興奮を収めるような、認知の方向を変えるような瀉の治療が必要と考えている。

延年半夏湯

構成生薬

半夏、柴胡、べつ甲、桔梗、呉茱萸、枳実、檳榔、人参、
生姜

主治

腹内左肋に痞あり、硬急、気満し、食する能わず、胸背
の痛むを主る。

解説

この方は痞（腹部のかたまり）の主方とす。東郭の説の通り、呉茱萸は左部に在るものにもっとも効あり。また脇肋の下よりして肩背に強く牽急する者によろし。もし、痞に手も胸背より腹中に及んで拘急する者は『外台』柴胡別甲湯をよろしとす。また黄胖にもちゆるに平胃散と上下の別在り、この方は上に位して胸満気急するを目的とす、平胃散は膈下にありて気急の症なし。

延年半夏湯は半夏を主薬として、気滞と痰湿を中心に改善する「理気化痰」処方。

慢性的な胃のはり・痛み、肩背部のこり、冷え、食欲不振がある症例に適する。

1-028 肺萎 消渴 歯齦の糜爛、膿性痰

宗助の妻。消渴数日癒えず。一医、胃熱とし、たびたびこれを下し、消渴止み、舌上赤爛、歯齦まで糜爛し、飲食できない。脈虚数、生臭い膿痰を吐く、宗伯は肺萎の病と診断し、炙甘草湯加桔梗を与えて、漸く治った。

炙甘草湯は桂枝甘草の補陽、人參の補気以外は全て補陰の生薬からなる。この糜爛は陰虚陽亢のびらんなのだろうか。清熱解毒の生薬を使わず、排膿作用を持つ桔梗だけで治している。難しい症例である。

考察

まず、他医が消渴を胃熱として承気湯や瀉心湯の下法をおこなったところ、咽の渴きはなくなり、舌が赤く、歯肉の糜爛、食べれなくなり、脈が虚数、さらに生臭い痰を吐くようになった。

おそらく、最初の口渇は、脱水による消渴ではなく、陰虚による咽の乾きだと考えられる。下剤によりさらに陰虚が進み、咽の乾燥はあるが口渇は無く、陰虚陽亢による舌の赤み、歯肉の糜爛が生じたと思う。頻脈も陰虚陽亢を示す。ただし、虚脈であること、飲食ができなくなったことは気虚も生じている。生臭い痰も陰虚を背景にした二次感染による粘稠な痰が生じている。私なら気血両虚の十全大補湯に滋陰降火湯をたすかもしれない。

宗伯もこの患者さんの病態を陰虚ととらえ、なおかつ肺痿としている。炙甘草湯を選んだのは、脈虚数を心陰虚ととらえたのだろう。桂枝甘草を心陽を守りながら、人参、甘草、生姜、大棗で脾を補い、阿膠、麦門冬、麻子仁、生地黄で養陰潤肺し、しっかりと肺陰を補っている。

しかし、生臭い痰に対しては炙甘草湯を投与した上で清肺湯などを考えてもよいのではないだろうか。

炙甘草湯

構成生薬

甘草、生姜、桂枝、人参、地黄、阿膠、麦門、麻子仁、大棗

主治

この方は、心動悸を目的とす。凡そ心臓の血不足するときは、気管動揺して悸をなし、而して心臓の血動、血脈に達すること能わず、時として間歇す。故に脈結代するなり。この方能く心臓の血を滋養して脈絡を潤流す。

応用

また肺痿の少気して胸動甚だしき物に用いて一時効あり。竜野の秋山玄瑞はこの方に桔梗を加えて肺痿の主方とす。蓋し『金匱』によるなり。また『局方』の人参養栄湯と治を同じくして、、、

この方は、外邪によりて津液枯槁し、腹部動悸あるものを主とし、人参養栄湯は外邪の有無にかかわらず、気血衰弱、動悸肉下にある者を主とす。

按ずるに炙甘草湯は建中湯より化して潤剤となるなり

按ずるに滋液を主とし、かねて虚熱を制する者なり

1-029 脚氣 胸中痞塞

羽白東作。夏から乾脚氣を患い、両足麻痺軟弱、医者にかかるが治らず、遂に両足萎弱となり歩けなくなった。冬になり年の暮れに至り、真の萎躄となり、それだけでなく、咽喉痞塞、飲食下らず、小腹から足まで不仁（感覚障害）となり、あたかも上半身と下半身が別人のようになった。

宗伯、思うにこの人、上下の気が交通できず、遂に胸中痞塞にいたっている。まず、その膈を利するならばその気、追々下降するはずだ。しかし、病状が頑固ため、容易には移動しない。そこで利膈湯を与え、化毒丸を少しばかり兼用する。これを服用して数日、咽喉漸くひろがり飲食が快下するようになった。この処方を春まで続けたところ、腰以下の血気が回復し、春が終わる頃には、以前のように歩けるようになり、復職することができた。

処方内容

利膈湯：半夏6.0；梔子3.0；附子0.5、甘草・乾姜各2.0

化毒丸：乳香10；大黄・雄黄・乱髪霜各3；輕粉1

「膈はなお治すべし。半夏氣を下し、附子邪を散じ、梔子鬱を解す、百発百中の妙方なり。早く治さざれば効なし。反胃、津液枯燥して渴するものに至っては、扁鵲でも治せない。」

噎：疏肝理氣、化痰降逆、清熱（香附子、半夏、枳実など）

・膈：破血散結、軟堅化痰、滋養補虚（桃仁、牡蛎、昆布、龜板など）

利膈湯（名古屋玄医）

構成生薬

半夏、附子、山梔子（甘草、乾姜）

私は、咽中炙癰の症例に、加味逍遙散合半夏厚朴湯を使用することがある。

肝鬱気滯を治す加味逍遙散と化痰理気開胸の半夏厚朴湯をあわせ、半夏、山梔子の利膈湯の方意も加えている。

主治

七情の気と邪気とが咽喉の間に相結び、飲食を噎（いつ）するを噎という。噎はむせる、痞えるという意味。胸腹に結んで、飲食膈にとどまり下らざるを膈という。噎はまだ食物が通る状態だが膈はさらに重症で飲食物が下に通らない。噎と膈の治療は噎：疏肝理気、化痰降逆、清熱（香附子、半夏、枳実など）膈：破血散結、軟堅化痰、滋養補虚（桃仁、牡蛎、昆布、亀板など）

解説

膈噎：食道癌など食道の狭窄、嚥下困難をきたす病。

名古屋玄医が梔附湯に半夏を加えた処方

飲みにくいので宗伯は甘草乾姜を合した。膈噎の初期によい。

『楊氏家蔵』二氣散（傷寒論の梔子乾姜湯）陰陽痞結、咽膈痞塞、状梅核のごとく、飲食を妨害し、久しうして癒えず。すなわち翻胃となるを治す。

化毒丸の比較 山脇家と外科正宗

出典：山脇東洋『山脇家経験方』

構成生薬：乳香10、大黄3、雄黄3、乱髪霜3、軽粉1

薬性の特徴：強力な清熱解毒・殺菌＋活血化瘀＋腐肉除去

主な作用： ① 強力殺菌（雄黄・軽粉）

② 熱毒消散

③ 腫脹疼痛軽減

④ 腐肉除去・肉芽促進

適応：急性化膿症（癰腫・瘍腫）の初期～中期で腫脹・疼痛が強い場合

安全性：毒性生薬（軽粉・雄黄）を含むため長期使用不可、短期集中型

方意の性格：「攻め」の外科方（短期間で毒を鎮め、膿を散らす）

雄黄は硫化ヒ素、軽粉は塩化第二水銀（ HgCl_2 ）

出典：『外科正宗』『外科大成』など清代外科方

構成生薬：金銀花、連翹、蒲公英、紫花地丁、赤芍、当归、穿山甲、皂角刺、甘草（流派により異同あり）

薬性の特徴：清熱解毒＋活血化瘀＋補血

主な作用：

① 熱毒を鎮め炎症抑制

② 血流改善

③ 炎症後の組織回復

適応：化膿症全般の初期～中期、虚証や長期療養にも適応

安全性：毒性成分なし、比較的安全で長期使用可

方意の性格：「温和型」外科方（炎症を鎮めつつ回復を促す）

胸痛に蘇沈梔子湯

蘇沈梔子湯

梔子、烏頭、薤白

『正伝』古梔附湯

胸痺切痛を治す。丹溪曰く、烏頭外束の寒を治し、梔子内鬱の熱を治す。すなわち内熱外寒の理、昭然なり。二物皆下焦の薬、梔子烏頭の引くところ、すなわち勢の下ること休息に、胃中に少緩するを許さず。

1-030 心下微結 共考

角力長雷権太の妻 外感解せず、悪寒、発熱、瘧のように汗がでて止まらない。衆医が一月あまり、風勞、血熱などとして治療するが効果が見られない。宗伯診察すると、脈沈弦、心下微厥、蓄飲あり、動悸あり、邪熱水飲併鬱の証として処方1を与えると、時々気が鬱冒して乾嘔している。そこで処方2を泡剤として兼用した。これを服用して2, 3日すると症状は半減して、数旬ならずして全快した。



共に考えよう

- 外感解せず、悪寒、発熱、瘧のように汗がでて止まらない。という病態は何か？
- 脈沈弦、心下微厥、蓄飲あり、動悸ありの病態と処方は？
- 処方1処方後、時々気が鬱冒して乾嘔しているのは何故か？

考察

長引く感染症、脈沈弦、心下微厥、蓄飲あり、動悸ありはまさしく柴胡桂枝乾姜湯の目標である。

しかし鬱冒（気血水や邪熱が胸中や頭部にこもって、頭が重い・視界がぼやける・意識がはっきりしないような症状）して乾嘔が発作的に出る状態となった。

これは柴胡桂枝乾姜湯の和解、温中、軟堅、利水で一定の効果はあって、おそらく微熱がとれ、動悸が改善、倦怠感もやや改善したが、心下の微厥がこの処方だけではとれずに気機の阻滯が残ったものと思われる。

宗伯は心下に溜まっているのが、水飲だけでなく熱邪、瘀血、気滯が併発していると考えたものと思われる。そこでなんと三黄瀉心湯をメイン処方として心下の熱鬱を瀉し、香附子、枳榔子で気滯を瀉し、紅花で血鬱を通じて鬱冒を治療した。三黄瀉心湯加香附子、枳榔子、紅花、記憶に留めておきたい組み合わせである。

三黄瀉心湯は金匱要略を出典とし「心下痞、按之濡、其脈関上浮者、大黄黄芩黄连を以て之を主る」とあり、「心下の熱鬱と停滞を一挙に瀉く」ことを目的とする。黄连と黄芩で心胃に滞った熱邪を瀉し、大黄で下に引いて熱邪を腸から清解する。

泡剤の「泡」は泡立てる意味ではなく、“湯をかけて服用する”方法を指す。この方法は大黄の瀉の効果がさらに強くでて瀉の意味合いが強くなる。

私は頭冒感と聞くと苓桂朮甘湯の利水ばかりが頭に浮かぶが、瀉心湯という選択肢も頭に残しておきたい。

1-031 耳だれの症例

後藤弘三郎の妹、16才。幼い頃より耳だれがあり、両耳から膿が出て近づけないくらい臭い。そのため左耳が聞こえない。嫁に行く年頃なのにと、いろいろな医師に相談する。宗伯は胎毒があるだけだと診断した。やさしく邪を攻めてその毒を出し尽くすのがよいと。そこで、葛根湯加川芎大黄を与え、五味鼯鼠丸を兼用した。数ヶ月経つと膿がようやく少なくなり、臭気がなくなって、左耳も聞こえるようになった。ほどなくして嫁にいけた。

葛根加川芎大黄の川芎大黄（芎黄散）の組み合わせについて

黄芩型芎黄散：川芎＋黄芩

主な薬能：清熱解毒＋活血化瘀 清熱力：中等（湿熱・熱毒を冷ます） 活血力：中等（瘀血・氣滯を改善）

特徴的作用：腫脹・発赤・化膿の抑制 主な適応：湿熱性炎症、初期～中期の化膿症（急性中耳炎、麦粒腫、リンパ節炎など）

使用形態：内服・外用とも可、比較的マイルド 証の目安：熱感・発赤・腫脹あり、瘀血軽度 注意点：虚証や冷えが強い場合は不向き

大黄型芎黄散：川芎＋大黄

主な薬能：瀉下逐瘀＋清熱解毒＋活血化瘀 清熱力：強め（血分の熱を冷ます） 活血力：強め（瘀血を排出しつつ血流促進）

特徴的作用：膿排出・硬結軟化・瘀血除去 主な適応：瘀血を伴う熱毒性炎症、硬く腫れた膿瘍（蜂窩織炎、乳腺炎、慢性化膿）

使用形態：外用・内服とも可、瀉下作用に注意 証の目安：実熱・瘀血顕著、便秘傾向、舌質紅・苔黄 注意点：体力虚弱者、下痢傾向では禁忌

創傷治療における川芎の役割

- ・ 活血行気、祛風止痛、**頭目清利**
- ・ 配当経絡：肝・胆・心包経（頭部や耳鼻領域への効きが強い）

川芎は 創傷の炎症部位の血流を改善し、免疫細胞や栄養を届けやすくし、瘀血を除き、腫脹と痛みを減らす。
また清熱薬（黄芩や大黄）と組み合わせることで、熱毒＋瘀血の両方に対応する

五味鼯鼠丸《吉益南涯》

構成生薬

軽粉（けいふん） 塩化第二水銀 強力な殺菌・腐蝕作用、壊死組織の除去 局所の病巣を殺菌・腐肉除去
強い金属毒性（ Hg^{2+} ）による殺菌効果。ただし組織障害も大きい。

大黄（だいおう） 瀉下・清熱解毒・逐瘀 排膿促進、腸管経由の排泄促進、瘀血改善

鼯鼠霜（えんそそう） 焼成モグラ粉末 硬結軟化、排膿促進、瘻管修復 動物性薬として慢性化膿巣の治癒促進
タンパク質変性物質、脂質、灰分（ミネラル）が組織修復を促す可能性。

鼯鼠霜は、「排膿・瘻管改善・硬結軟化」の動物性薬として加えられている。

赤小豆（せきしょうず） 利水消腫、解毒排膿 浮腫軽減と排膿補助

遺糧（いりょう） 古い米粉・炒米粉 補中、瘡口保護、薬性の緩和

潰瘍・瘻孔・慢性化膿などの排膿促進・腐肉除去を狙った処方

南涯は、慢性瘻孔や難治性膿瘍の「閉じない傷」に対してこの組み合わせを用いた

考察

葛根加川芎大黄は頭頸部の感染を伴った炎症に効果を発揮する。

現代ではモグラの黒焼きはないので、竜胆瀉肝湯、荊芥連翹湯、黄連解毒湯などの清熱薬を併用する。古方なら小柴胡加桔梗石膏に葛根加川芎辛夷、三黄瀉心湯か。

また子供の頃からの慢性炎症であるから千金内托散《和剂局方》:黄耆、人參、当歸、川芎、防風、桔梗、白芷、厚朴、甘草、桂皮(金銀花を加えても可)の併用も考えられる。

西洋医学なら損傷部の滅菌、デブリッドマン、アセトアミノフェン、抗生物質の投与がおこなわれるだろう。

1-032 心下痞硬と背部悪寒の症例

症状

1

薪屋清兵衛の妻、40才。心下痞硬、時々雷鳴下痢し、飲食が進まず、日々、背中が悪寒して火にあたりたくなる。多くの医者が治療するが効果が無い。

2

診断

宗伯は、病は心下にあつて、心下痞硬が任脈を阻滞して、このために督脈ものびのびと流れることができない。

治療

3

そこで半夏瀉心湯に附子を加えて処方したところ、数日で悪寒がなくなり、痞えも徐々になくなった。その後、気鬱して羸瘦がひどくなった。そこで逍遙散加地黄香附子を処方して全快した。

考察

心下痞鞭、時々雷鳴下痢は半夏瀉心湯を思わせる。私なら悪寒があることから葛根湯をあわせて葛苓連湯の代用とするかもしれない。

気鬱に対して加味逍遙散加地黄香附子をあわせ、地黄で補陰しながら肝鬱気滯を治療している。

半夏瀉心湯

構成生薬

黄連、黄芩、人参、半夏、甘草、乾姜、大棗

小柴胡湯の柴胡を抜いて黄連を加えたもの。

加減方

● 心下逆満動悸するものには茯苓を加える。 吉益家

● 背中に悪寒するものには附子を加える。 宗伯

● 気鬱する者には香附子を加える。 恵美氏

● 癖飲あるものには、呉茱萸、牡蠣を加える 和田
東郭

● 寄生虫症で悪心がひどいもの蜀椒、烏梅を加える。

1-033 顎下の痰核の症例

其兵衛の息子16才。顎の下に小さな塊あり、数年治らない。

医者は瘰癧と言ったり、気腫と言ったりする。その塊は柔軟で筋脈に固着する様子はなく、齒齦に病が及んで膿をつくるような勢いが無い。おそらく痰核が一箇所に集まった者だとして、二陳湯加皂角刺を与え、五倍子、朴硝、大黄、天南星四味を研磨して酢に漬けて額に核上に貼った。数週後、痰核は全くなり再度腫れることもなかった。

考察

痰核の処方としては消癰丸《医学心悟》：玄参・牡蛎・貝母がある。顎にあるので、葛根加川芎、黄芩に消癰丸をあわせた処方を考える。古方なら小柴胡加桔梗石膏、葛根湯、薏苡仁など。

皂角刺はマメ科のサイカチのトゲの部分で、消腫排膿、活血散結、通経下乳で頸部リンパ節炎などの瘰癧に内服、外用ともに用いられる。五倍子はタンニン（没食子酸など）を豊富に含み、収斂・止血・抗菌・抗炎症作用が強く、外用でも用いられる。

大黄、朴硝（芒硝）の消炎、抗菌、軟堅作用あり。天南星はサトイモ科のテンナンショウの塊茎で、化痰の生薬だが、外用で散結消腫、祛風止痛、化痰散結、排膿促進の作用を持つ。酢で練るのは、酢の溶媒・浸透促進作用、抗菌作用、蛋白変性作用があるため。ただし酢も局所の刺激作用があるため注意が必要。

酢練外用に用いられる生薬

天南星 散結消腫・化痰 活血化瘀・浸透促進・局所血流改善 瘰癧、癰腫、慢性硬結

白芥子 温経散寒・行気通絡 活血温通作用を増強し、痰湿の排除を促す 寒湿による関節痛、慢性腫脹、瘰癧

大黄 清熱解毒・破瘀逐瘀 瘀血除去・消腫排膿作用の強化 化膿性皮膚疾患、癰腫、乳腺炎

乳香 活血止痛・消腫生肌 浸透促進・疼痛軽減作用を高める 打撲、挫傷、慢性関節炎

没薬 活血散結・消腫止痛 鎮痛・抗炎症作用の増強 瘀血による腫脹痛、外傷

皂角刺 消腫排膿・活血散結 化膿抑制・硬結軟化を促す 癰腫、瘰癧、乳腺炎

桃仁 活血祛瘀・潤腸 瘀血除去作用を強める 打撲、瘀血性腫脹

紅花 活血通経・散瘀止痛 血流促進作用を増強 瘀血性の疼痛・腫脹

1-034 寒疝による足の引きつれ

伊豆屋七五郎 腰や腹の拘急がひどく、両足が引きつり、立つことができず、昼夜呻吟してうめいている。

宗伯は、芍甘黄辛附湯を与え、二、三日で痛みがまったくなくなった。この証は寒疝に属する。しかし通常の寒疝の方剤では作用が緩慢でなかなか効果が得られない。私は寒疝を治すのにこの方剤や、附子建中湯を用いて、熱疝を治すには、四逆散加茴香茯苓、及び大柴胡湯加茴香甘草を用いて、すぐれた効果を得ている。古方の効き方はかくの如くすばらしい。

考察

腰や腹が痛くて、両足が引きつり、立つことができないというキーワードから連想されるのは、去杖湯の別名を持つ芍薬甘草湯である。芍薬甘草湯は骨格筋、平滑筋双方に対して鎮痙作用があり、本例でまず考えられる急性期の処方である。江戸時代は脚気による下肢筋肉の痙攣によく用いられた。

本例では冷えの存在については明記されていないが、冷えによる寒疝には芍薬甘草湯に附子を加えた芍薬甘草附子湯が冷えによる鎮痛作用も期待して処方される。更に気虚、陽虚がある場合、補気の黄耆、補陽鎮痛の細辛を加えて芍药黄辛附湯が処方される。その他寒疝による腹痛には外寒に当帰四逆加呉茱萸生姜湯（細辛あり）、内寒に附子理中湯大建中湯などが使用される。また鼠径部の冷えには寒滯肝脈として当帰四逆加呉茱萸生姜湯の他に景岳全書の暖肝煎（枸杞子、当帰、小茴香、烏薬、茯苓、生姜、肉桂、沈香または木香）が用いられる。

1-035 角田勝蔵の妻の症例

角田勝蔵の妻、24か25才、産後寒疾、数十日解せず、胸中煩悶、譫語、人事不詳、腹虚濡、舌上苔なくして乾燥。

考察1

若い産後の女性、産後であるから気血両虚が存在するだろう。腹濡も産後の四物湯のお腹を思わせる。この若さで苔がないということは、飲食も十分にできず栄養失調で陰分の虚が激しいと思われる。地黄が重たければ黄精や麦門冬。基本処方十全大補湯を考えたい。しかし、一方で人事不詳、胸中煩悶、譫語とは何か、感染症もなく熱もないとすれば、パニック障害か。さすれば甘麦大棗湯の適応か。肝血不足による肝陽上亢とすれば浅田家の得意処方である抑肝散加芍薬黄連か。私なら釣藤鈎15、黄連5、甘草5、大棗8、小麦10、当帰8、川芎3、茯苓8とするかな。落ちついたら加味帰脾湯に桂枝加竜骨牡蠣、酸棗仁湯などの併用を考える。もうひとつ気になる処方産前産後の神経症に用いる女神散である。浅田家の女神散は当帰、川芎、香附子、黄連、黄芩、桂枝、甘草、人参、朮、檳榔子、木香、丁字、莎草からなり、もと安栄湯と称し、軍中七氣に用いた処方で婦人血症に用いて特験あるをもって今の名をあり、産前産後の上衝眩暈などの証によいとある。やはりこの処方か、、、、

考察2

さて宗伯は実にシンプルに上焦蘊熱と診断して黄連解毒湯を処方している。服すること、2, 3日で煩悶譫語が止み、精神やや復すとある。ただ不大便数日、脈数解せず、皮膚甲錯、よりて参胡芍薬湯（柴胡、芍薬、甘草、枳実、黄芩、人参、地黄、麦門、知母、生姜）を与えて調理常に復す。としている。私はこの処方はいまだに思いつかなかった。以下に勿誤薬室方函口訣から引用する。

傷寒十余日、外余熱未だ解せず、脈息未だ緩ならず、大便不快、小便黄赤、或いは渴し、或いは煩し、安睡を得ず、飲食を思わざるを治す、これ邪氣未だ浄からず、正氣未だ復せず、当にその虚実を量ってこれを調うべし。

この方は大柴胡湯の半夏、大棗を去り、知母、人参、生姜、麦門、甘草を加えたるものにて、その証もほぼ大柴胡湯に似たれども、その脈腹、大柴胡ほどの実したところなく、また胸中に飲を蓄ふる様子もなく、ただ熱往来（じんぜん：だらだらと過ぎる）として数日を経、津液枯燥して解すること能わざる者に用ゆ。東郭の説に、すべてかのような所に生姜を主剤としてもちゆるは、実証の解熱に石膏を用いると同段にて、多年用いて効験多し。今この方中に知母、生姜と組たるは即ち実証に、知母、石膏と組みたると同趣意なり。

余、嘗て小柴胡湯の証にして虚に属する者を治するに補中益気湯をもってし、大柴胡湯の証にして虚に属する者、参胡芍薬湯をもってす。

生姜は温・辛で気機を動かし、滋陰薬（知母・麦門冬）の重さを中和しながら、残った熱を外に散らすという意味で大事な生薬としているのは興味深い。地黄の滋性による胃もたれを予防するのに縮砂を使うのに似ている。

1-36 小児の高熱と痙攣

症状

1

薬屋の藤屋覚兵衛の次女、11才。生来虚弱で、時々高熱を発し、痙攣してうとうととする。宗伯は千金竜胆湯を与えて、熱をさましている。

2

経過

その後、咳嗽、寝汗が出て、羸瘦し、脈波虚数、小便赤渋、飲食も進まない。そこで、聖恵人参散を与えてよくやく治る。主人は漢方医学に詳しいので、私の治法の意味について問う。

解説

3

私が答えるに、15歳以下は疳といい、15才以上は療と称す。『幼科準繩』に児童20歳以下その病、疳となし、20才以上は癆というが、源はひとつである。

考察

生来虚弱で高熱を發し、痙攣してうとうととする。これは感染症を繰り返しているのか、いわゆる疳虫で高熱を發しているのかわからない。ここでは疳虫として考える。11才女子だから、氣鬱の柴胡証がでていてもおかしくない。よって柴胡加竜骨牡蛎湯に甘麦大棗湯を加えてはいかがだろう。ところが宗伯は竜胆という強い清熱解毒薬を用いて本症を治療している。これは単なる疳虫というより（注）にあるように軽い脳膜炎の初期であったかもしれない。

千金竜胆湯

竜胆、釣藤鈎、柴胡、黄芩、桔梗、芍薬、茯苓、甘草

嬰兒出腹、血脈盛実に、寒熱温壯、四肢驚掣し、発熱、大いに吐衄する者を治す。若し、すでによく嘔を進むも、食に中り実に消せず、壯熱及び変蒸解せず、諸々の驚疳悉くこれを主る。

（中略）吐乳、驚疳の初発、この方に如くはなし。この症にして心下急ナ迫あれば大柴胡加羚羊角甘草、効あり、その一等軽きものを抑肝散とす、すべて大人小児の癇性に活用すべし。

（注）本方の症は、洋家のいわゆる小児脳膜炎の初期である。単に高熱でひきつけのときは新続命湯を用いる。
新続命湯《有持桂里》（石膏10;芍薬・葛根各4;麻黄2-4;桂枝3;甘草2.5;羚羊2）

1-037 外感後の労状に聖恵人参散

藤本立連 外感解せず、数十日、咳嗽、盗汗、脈数、ほとんど労状（肺結核？）を呈している。余、聖恵人参散を与ふ。これを服用すること数十日で、病は完治し大いに喜ばれ、詩を送られた。その結に、聖恵一方蘇死人の句あり。

うーん。人参養栄湯？陰虚の熱に地黄、知母、麦門冬、土別甲、玄参？

人参散（聖恵）

構成生薬

柴胡、芍薬、甘草、人参、黄耆、茯苓、牡蠣、べっ甲、麦門冬

べっ甲はウミガメ科のタイマイの背甲（甲羅）の一部で陰虚による虚熱や骨蒸潮熱（夕方から夜にかけて体がほてる）を冷まし、滋陰潜陽の薬能を持つ。

参考）聖恵人参散という処方あり

【出典】『聖恵方』（太平惠民和剂局方）

【構成生薬】人参、白朮、茯苓、甘草、陳皮、半夏、山薬、蓮肉、薏苡仁、桔梗、白扁豆、砂仁
江戸時代、小児虚弱・慢性下痢・産後衰弱に広く処方された処方。参苓白朮散に似る。

主治

熱病後の虚勞、盗汗在り、口苦く、睡臥し得ず、四肢煩痛し、舌乾き卷渋するを治す。

この方は虚熱盗汗が目標にて、骨蒸勞熱の初起、柴胡桂姜湯よりは一等虚候のものに持ちうべし、咳嗽甚だしき者は五味子を加うるなり。

1-038 感冒後片頭痛

本康梅顧 感冒のあと片頭痛を患い、昼夜劇しきこと甚だしく、不眠。煩熱口渴、乾嘔、数十日食欲がなく食べられない。

宗伯は『儒門事親』の香芎湯を与えた。ほどなくして解熱し、痛みも大いに改善した。この患者さんは平素より、心下に飲があり、腹裏拘急、時々、頭痛を苦しむ。

すなわち当帰四逆加呉茱萸生姜湯を持って調理した。

香芎湯（儒門）

構成生薬

石膏、桂枝、川芎、甘草、薄荷、莎草

右六味『中蔵経』桂枝、薄荷なく、香芎散と名づける。一切の頭風を治す。

莎草は香附子のことカヤツリグサ科ハマスゲの根茎。疏肝解鬱、調経止痛の薬能を持つ。

即ち香附子、川芎、桂枝、薄荷で気鬱による頭痛を治し煩熱口渴という熱証を石膏で滋陰清熱潜陽している。

解説

もしこの証にして項背強急して痛む者は本事方の釣藤散がよい。

1-039 下血、萎黄

東雲房、下血が数ヶ月止まらない。面色萎黄、動悸甚だしく、行歩すれば、吸吸促迫し、目弦、四肢微腫あり、前医、地黄剤を与えて、その症状はますますひどくなった。宗伯は、和田東郭の門人の竹中文慶より伝え聞いた茵荊湯を与えた。数日にして下血が止み、諸症状はようやく治った。

考察

下血の処方、痔なら乙字湯に芍帰膠艾湯や黄連解毒湯や温清飲を考える。面色萎黄、動悸甚だしく、行歩すれば、吸吸促迫し、目弦、四肢微腫ありとあるからかなり貧血が進行している。鉄の補給が不可欠で。貧血が進行している場合は、四物湯など補血剤より四君子湯の適応と日本漢方では言われている。私なら痔の座薬、炙甘草湯あるいは十全大補湯に苓桂朮甘湯、鉄の静注、瘀血と止血で田七人參併用かな。前医が地黄剤を用いてますます悪くなったとあるから十全大補でなくやはり補中益気湯か。

茵荊湯

構成生薬

茵陳、荊芥、茯苓、蒼朮、猪苓、沢瀉、蒲黄、鉄粉

やはり鉄剤使用している。以外に浮腫を重視して茵陳五苓散的な処方。止血に蒲黄。桂枝を使わないのは桂枝の温性が出血傾向を促進するのをさけるため、荊芥も温性だけど薬性が穏やかで荊芥炭は止血効果もある。茵陳蒿は湿熱を除き、出血原因の一つである充血・炎症を鎮める作用を期待している。会陰部、肛門は肝経、胆経が流注している。

主治と解説

下血止まず、身体萎黄、或いは浮腫あるものを治す

この方は竹中文慶の家方にして、痔血ひさしく止まず、面色萎黄、身体浮腫、短気、目弦して行歩することができないものを治す。また虚勞、下血して水気あるものを治す。この方は利水中に止血鎮墜の意を寓するので、運用して意外と効果がある。

1-040 産後の項背強痛

信濃屋金三郎の妻、産後肩背強痛、起きることも寝ることも寝返りすることもできず、衆医が治療するが数ヶ月たっても治らない。宗伯がみるに、これは産後の柔中風であるので千金独活湯を用いるのがよい。これを服用して五、六日で痛みは半分になった。それから一月あまりで、起きたり寝たりが自由にできるようになり、終始一貫してこの方剤で全治した。

考察

私なら産後の気血両虚と痛みというところから独活寄生湯の方意をもつ大防風湯を選択して、気血を補いながら鎮痛し、項背部の凝りに対して葛根加朮附湯を追加して調理する。

千金独活湯:

葛根、桂枝、麻黄、芍薬、甘草、生姜、大棗、独活、地黄

葛根湯をベースに腰背部の風湿痺を除く独活、桂枝、麻黄による傷陰を防ぎ、地黄の補陰清熱鎮痛作用を期待した処方となる。地黄一味の存在は大きい。大防風湯の方意を地黄と独活の二味で実現しているのはすごい。